

参考文献

- 池田摩耶子 1974「進んだ段階における「話し言葉」について」『日本語教育』23号, 日本語教育学会, 1~7頁
- 伊豆原・嶽 1992「中・上級学習者の話し言葉(独話)の分析と考察」『日本語教育』77号, 103~115頁
- 井出祥子・櫻井千佳子 1997『視点と言語行動』田窪行則編くろしお出版
- 大江三郎 1975『主観性の日英語比較』南雲堂
- 大河内康憲 1983「日・中語の被動表現」『日本語学』4月号 明治書院 31~38頁
- 大河内康憲 1992「被動が成立する基礎—日本語などとの関連で—」『中国語学』220 中国語学研究会 1~12
- 金水 敏 1992「場面と視点—受身文を中心に—」『日本語学』8月号 明治書院 12~19頁
- 久野 暉 1978『談話の文法』大修館書店
- 佐伯 胖 1978『イメージ化による知識と学習』東洋館出版社
- 鈴木重幸 1972『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 鈴木情一 1988「視点の言語心理学的研究」The Science of Reading, Vol. 32, No4 151~167頁
- Dechert, Hans W. 1983 "How a story is done in a second language", in C. Faerch & G. Kasper ed. *Strategies in Interlanguage Communication*. Longman.
- 馮 富栄 1993「日本語受動文の学習過程における母語—中国語の影響について」Japanese Journal of Educational Psychology 41 日本教育心理学会 22~32頁
- 平林幹朗 1993『サピアの言語論』勁草書房
- 水谷信子 1985『話しことばの文法』くろしお出版
- 山下秀雄 1986『日本のことばとところ』講談社学術文庫
- 山梨政明 1995『認知文法論』ひつじ書房
- 楊 凱栄 1988「文法の対照的研究—中国語と日本語—」『講座日本語と日本語教育』明治書院 312~340頁
- 劉 素英 1991「受動表現における日中言語の比較」『ことば』12号 現代日本語研究会 97~112頁
- 劉月華他 1991『現代中国語文法総覧(下)』相原茂監訳 くろしお出版
- 渡邊亜子 1996『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版

来事を、一人の人物を主体として表現できる言語であり、中国語はそれができない。しかし、このことから中国語は主観性や自己中心性が弱い言語であると言い切ることができるであろうか。

言語がどこまで文化や思考に関わるのかという問題は、平林が指摘するように「特に言語教育の場においては深く考慮しなければならない言語の大きな一側面である」(1993:204)。「ある人物寄りの視点」の傾向を有するJにとって、〈移動注視点〉の傾向の影響を受けて「中立視点」的叙述になったCの日本語の発話は理解しにくい。このようなCの日本語の原因が母語の認識の違いであれば、“日本語はCの母語とは出来事のとらえかたが異なり、「ある人物寄りの視点」で展開すれば、上手に受け身文や授受補助動詞を駆使できる”という指導が有効であろう。しかし、認識は同じであるが言語形式が異なる場合は、“CとJの出来事のとらえかたは同じであるが、言語形式が違う”という指導になる。語彙レベルは文化的・社会的違いが反映しやすいが、「視点」の問題は統語的な文法範疇に属するため、文化と言語形式との関係が複雑に絡み合っている。日本語教育の現場において、J的な談話展開ができるようCに指導するには、Cの母語の「視点」にかかわる言語形式、文化・思考との関係についてのより詳細な知見を得る必要がある。今後、さらに言語資料を増やし、語用論、認知論的な観点から検討を進めていきたい。

中国語の文字化は北京出身の何彬氏のお力添えによる。ここに深く感謝申し上げる次第である。

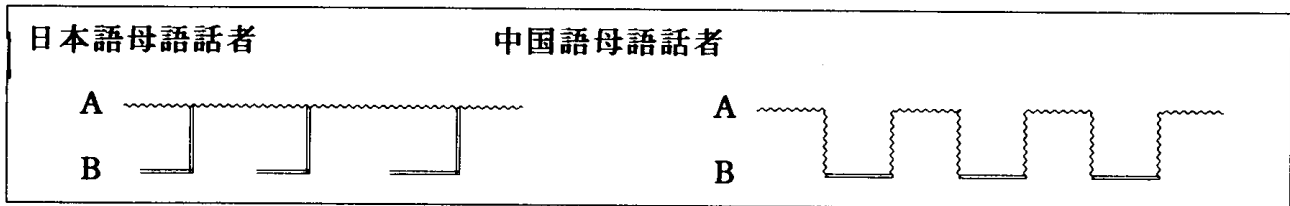
注

- 1) 久野(1978)の「視点」では《だれを》《どこから》みるというように分けてはいない。佐伯(1978)は「視点」を《だれを》→〈注視点〉,《どこから》→〈視座〉と2つの要素から捉えている。本論文での「視点」の捉え方は、久野のカメラ・アングルと、佐伯の〈注視点〉+〈視座〉の捉え方の双方を採用している。〈注視点〉は談話展開のプロセスについて言及するときに用い、「～視点」は展開スタイルを分類するときに用いる。
- 2) 目下、学習者の母語が学習言語の語彙や統語形式にどの程度影響するかについては論争中ではあるが、筆者の1992年の中・上級日本語学習者の調査結果では、統語形式に大きく影響しているという結果であった。
- 3) さきの調査(1992)で、聞き手と言語資料提供者とが相対する位置で録音収集を行ったところ、言語資料提供者によっては、漫画の内容を聞き手と共有しているという状況と捉え、内容説明を簡略してしまう場面があった。そこで、その反省にもとづき漫画情報をまったく共有していない状況をつくるため、不自然ではあるが話者に対して聞き手の筆者は、背を向けるという姿勢をとることにした。

馴染みの有無が知覚レベルのバイアスとなったからではなく、中国語は話者が共感する人物の行為を描写する場合でも、その人物と関係する相手の行為を対立させて叙述していく性格を有する言語であることに起因することが再確認できた。

図1は登場人物A・Bの織り成す出来事を、「Aよりの視点」で談話展開した場合の、Jの日本語、Cの中国語それぞれの〈注視点〉の移動をモデル化したものである。

図-1.



つまり、Cの母語は「ある人物よりの視点」でも〈移動注視点〉であり、渡邊(1992)で、Cの母語の談話展開の「視点」を〈移動注視点〉から「中立視点」と判断したことは手続き上問題があったことは認めざるを得ない。

つぎに、本稿のもう一つの目的である「ある人物寄りの視点」に関わる中国語の言語形式については、人称代名詞による「視点」人物との照応、評価や感情を表す表現、談話開始の〈注視点〉のほか、受け身文も今後「視点」との関係で検討する必要があるのではないかという結果を得た。

渡邊(1992)では、Sの母語とJの日本語の「視点」の違いは、サピア(1921)の「思考を表現するとき、言語ごとに異なった、固有の、思考の溝を走って、文が形成され」(平林1993: 197)、したがってウォーフ(1956)の「言語がことなれば思考もことなる」(平林1993: 202)という考え方で捉えていたので、Cについても「中立視点」的世界認識であると考えていた。しかし、英語でも“a little dog”の“little”が、話者の「視点」が犬にあることを示して(Dechert H. W. 1983)いるように、「ある人物寄りの視点」を表す言語形式は諸言語において多種多様であると考えの方が妥当であろう。

日本語の表現については、「日本語には立場志向が強い」(1985: 24)という水谷の指摘や、「日本語のように、素材としてのことばに主観性や自己中心性が強い場合には、表現に当たっては対人関係を配慮して、自然と控えめな態度にかたむく傾向がある」(1986: 9)と、日本語と日本人の行動の関係について触れている山下の見解がある。確かに、日本語は複数の人物の織り成す出

の受動文の語用的条件」(楊 1988)を満たすものであるが、〈移動注視点〉の展開のなかでも「視点」人物が「被害」を受けたと感じたときは、その場面だけ受け身文が使えるようである。

4-2 中国語母語話者の「視点」に関わる言語形式

4-1 で考察した〈注視点〉と受け身文、既に指摘されている単純方向補語以外に、材料①②③全体を通して、シート a とシート b, c との違いについては、つぎのような傾向が見られた。

(1) 「視点」人物以外の行動を叙述する際には、「視点」人物の人称代名詞を「非視点」人物の前に被せている。例えば、C1 はシート b の E (ご主人) > E (奥さん) の場合は“我朋友，他妻子挺厲害的就今天她就命令他”と描写し、シート c の E (奥さん) > E (ご主人) では“我朋友对她丈夫……”と表現する傾向がみられる。C2 も E (奥さん) > E (ご主人) の時に、同様に“~她丈夫……”と「視点」人物の人称代名詞を「非視点」人物の前に被せている。このように、誰の話題として展開しているかがわかるように、人称代名詞を照応にかかわる言語形式として使用する傾向がみられる。

(2) 「視点」人物には、能力や性格についての描写を加える傾向がある。例えば、C2 は材料①のシート a ではいずれにも能力的評価をくだしていないが、シート b の E (カラス) > E (いぬ) では“我家的那個烏鴉呢，“特聰明(かしこい)”とプラス評価をしている。材料②でも、シート a では性格的評価を加えていないが、シート b の E (ご主人) > E (奥さん) では“我朋友她特別懶骨頭……”，シート c の E (奥さん) > E (ご主人) では“我朋友的丈夫……”と性格的評価を下している。しかし、C1 はシート a, b, c にはこのような違いはみられず、いずれも同じような描写である。このほか、C2 は材料③のシート b の E (お母さん) > E (子供) で、“我朋友特別不耐煩，因為好多事儿要干”，“朋友特着急”など「視点」人物の感情を細かく表現している。また、談話開始の〈注視点〉が話者の共感した対象である傾向が強い。

5. 結 論

以上のことから、渡邊(1992)の調査結果で J は「ある人物寄りの視点」、C は「中立視点」という異なる「視点」になったのは、漫画の登場人物に対する

ある人物への共感を促した b・c の叙述を比較した結果、〈注視点〉の移動および受け身文については表-2 のようになった。

表-2.

シート a: 共感の促しなし				シート b: E(A) > E(B)			シート c: E(B) > E(A)			
〈注視点〉		固定	移動	受身文	固定	移動	受身文	固定	移動	受身文
C1	①	—	○	—	—	○	—	—	○	—
	②	—	○	—	—	○	—	—	○	—
	③	—	○	—	—	○	—	—	○	—
C2	①	—	○	—	—	○	—	—	○	○
	②	—	○	—	—	○	—	—	○	—
	③	—	○	—	—	○	—	—	○	○

表-2 から、a, b, c, それぞれのシートにおける C1, C2 の中国語の叙述の傾向をまとめると次のようになる。

(1) 材料①について

C1 では、シート a と、シート b, c はいずれも〈移動注視点〉である。C2 も全て〈移動注視点〉であるが、シート c の E (いぬ) > E (カラス) では食物を主語とした“讓烏鴉給吃了”の形の受け身文を使っている。その他、談話の開始直後でも“讓个烏鴉給騙了 (カラスにだまされた)”いぬを主語にした受け身文を使っている。この“讓 rang”は受け身文の介詞“被”同様、主語からみて不愉快或いは被害内容を表すことが多く (劉: 1991), C2 は“いぬ”の受けた被害を“いぬ”の側から描写していると考えられる。

(2) 材料②について

C1, C2 ともシート a とシート b, c に違いはなく、〈移動注視点〉であり、J が受け身文にしている場面については、全て能動文である。

(3) 材料③について

C1, C2 のシート a とシート b, c は全て〈移動注視点〉である。この材料には日本語同様、中国語でも人称主語の直接受け身文が作れる場面があるが、C1 は“・・拾着他走”と能動文で表現し、C2 は“結果被她媽媽一把拽住回家 (結局お母さんに引っ張られて・・・)”と受け身文にしている。C2 の受け身文は、「受動文の多くが (不如意) の事態を表すのに用いられるという中国語

我朋友(B)又讓隣居把那個美人儿給扛走了。

材料③A = 母親 B = 子供

《シート a》

C1: 這是聖誕節前, 可能是聖誕節前一天, 或者是前一段日子, 窗子也都裝飾着許多漂亮的聖誕老人, 礼物之類的。然後這個媽々(A)帶着小孩儿上街可能去買東西, 還是去辦事儿。這小孩儿(B)看那個窗里擺着那麼漂亮的東西, 就到處看, 嘴, 哎呀, 都看不過來, 都不願意走了。然後這個媽(A)急了, 就那個把她那衣服給拾上來, 把她的眼睛給蒙着她上來走。

C2: 孩子跟那個媽々(A·B)一塊儿過商店, 那孩子(B)呢, 不斷地東瞧西瞧, 一会儿看看那個聖誕老人, 一会儿看看聖誕樹, 但是她媽(A)呢, 特不樂意。她媽(A)一把拽着孩子說“還有事儿要干呢”。就把孩子給拖回家了。

《シート b E(A) > E(B) に操作》

C1: 我朋友(A)有一天帶小, 哦, 聖誕節前, 帶小孩上街去辦事儿, 去買東西。聖誕節前, 商店的櫥窗里都裝滿美麗的礼物啊, 還有聖誕老人之類的。那小孩儿(B), 朋友的小孩儿(B)看了都, 嗯, 特高興都不願意走, 朋友(A)特着急, 老得拖着小孩儿, 最後沒有辦法, 就把那個小孩儿的衣服拾起來給他臉給罩住了。

C2: 我朋友的孩子(B)呢, 一逛商店就特喜歡東看西看, 然後她(A)呢就我朋友(A)特別不耐煩, 因為好多事儿要干。結果那天聖誕節那天, 到百貨商店, 她兒子(B)又要看聖誕樹, 又要看聖誕老人。她(A)就一把拽住她兒子的衣服, 把他拖回家了。

《シート c E(B) > E(A) に操作》

C1: 今天, 我認識那個小孩, 他媽(A)帶他上街去, 他(B)一看到那聖誕節前, 前, 就商店里都擺滿了礼物啊! 裝飾的聖誕老人, 什麼都特漂亮的。他(B)就看呆了, 都到處看, 都不願意走。他媽(A)急了, 就把他衣服給拾起來, 把那腦袋給罩住了, 拎着他走。

C2: 我朋友(B)呢, 一進百貨商店特別喜歡東看西看。但是呢, 她媽媽(A)就是不讓她看。有一天呢, 聖誕節那天呢, 她(A)去百貨商店, 然後又是聖誕老人, 又是看聖誕樹, 結果(B)被她媽媽一把拽住回家。

4-1-2. 考察

〈注視点〉〈視座〉を指示しない a の叙述と, 〈注視点〉〈視座〉を指示して,

草，然後這丈夫(A)修草的時候，看那個外邊兒有一個美人兒，穿着游泳裝躺在那兒，在椅子上曬太陽，他(A)眼睛都發亮了。他(A)非常高興，一直到最後把草都鋤完了，還一直盯着那美人兒。但是突然間那個鄰人的那個一個婦人就跑過來，把那個美人兒給扛起來，原來是一個怎麼說呢是一個模特兒然後他這丈夫(A)，簡直是大吃一驚。

C2: 有一天呢我看到一對夫妻(A·B)，那個夫人(B)呢要她丈夫去那個，她丈夫去除草，她丈夫(A)挺不樂意地並不樂意地到那院子里，結果他(A)到了院子里一看呢，鄰居的鄰居家的院子里，躺着一個非常漂亮的女孩兒，然後那個那個那個丈夫(A)呢就看着那個看着那個美人兒干活越來越有勁兒，干得滿頭大汗，不斷地目焦着那個美人兒，不過那美人兒一動也不動。等他(A)活干完以後呢，突然發現那美人兒被扛走了。原來那美人是假人兒，是模特兒。

《シート b E(A) > E(B) に操作》

C1: 我朋友(A)，他妻子(B)挺厲害的就今天她(B)就命令他，命令我朋友去割草，然後我朋友(A)就說割草，突然間看到外邊兒有一個女人躺在椅子上休息，曬太陽。他(A)特高興，然後就說一直盯着那個美人一直到最後那草割完了，割完了，還在欣賞那個的美人兒，但是這時候突然間，這時候，旁邊就來一個老大娘，就把那個的美人兒給扛起來了，原來那美人兒是一假人，可，我的朋友(A)簡直是，呆住了。

C2: 我朋友(A)呢特別懶骨頭我看到一個一對夫妻(A·B)，那個夫人(B)呢要她丈夫去那個，她丈夫去修草，她丈夫(A)挺不樂意地到那兒院子里，結果呢他(A)到了院子里一看呢，鄰居的鄰居家的院子里面，躺着一個非常漂亮的女孩兒，然後那個那個那個丈夫(A)呢就看着那個看着那個美人兒，他(A)越干越有勁兒他(A)把院子里的活全都干完了，他(A)突然發現那美人兒被扛走了。原來那美人兒是假的。

《シート c E(B) > E(A) に操作》

C1: 我朋友(B)對她丈夫挺嚴格的。這次就(B)命令她丈夫，去割草，她丈夫(A)割着割着，突然發現外邊兒有一個美人躺在椅子上，他(A)眼睛，他特高興，他(A)就邊割草，一直盯着那美人兒，但，到最後，突然來了一個老大娘把那美人兒給抱起來了，抬走了，抱走了。原來那美人兒是一個假模特兒，我朋友的丈夫(A)就瞪呆住了，吃了一大驚。

C2: 我朋友的丈夫(A)特懶，她(B)就想辦法，怎麼騙她丈夫去干活。她(B)就對鄰居家人說：“在你們院子里放一個美人兒。”然後她鄰居就在院子里放了一個假的美人兒。結果她丈夫(A)就看着那美人兒，使勁地干活兒。等他活兒干完以後呢，

219(6)「視点」再考—中国語の「視点」を表す言語形式—

C2: 一天我看到一隻狗，一隻狗(B)很想着，被拴在樹上正想吃，正想吃一塊麵包，一隻烏鴉(A)呢在那個樹的上面，然後那隻烏鴉(A)呢，就下來對狗，不知道了些什麼，然後那個狗(B)就突然繞着那個樹轉圈兒。烏鴉(A)可能是也想想吃那個麵包呢，就騙那個狗，說“你能不能那個繞樹打圈兒啊”。然後那個狗(B)就轉啊轉啊，結果他那個繩子越拴越緊，把自己都拴在樹上了。烏鴉(A)就把那個麵包給吃了。

《シート b E(A) > E(B) に操作》

C1: 我們家養了(一隻狗)，和隻小鴨，…這天啊就…也不知道是誰呀，就是說，隨意地擺，可能是什麼食物吧，就擺那個狗旁邊，然後這兩個(A·B)看着都想吃，就想辦法搶，然後這個鳥(A)呢就挺聰明的，這烏鴉也聰明，挺鬼的，就先跑到左邊，左右地到處飛，然後這狗(B)呢就追着這鳥，追來追去的，然後他那個脖子上的繩子就全卷到那個柱子上了，這樣他(B)就那夠不着那食物，就成了烏鴉的東西了。

C2: 我家的那個烏鴉呢，特聰明(A)，他(A)有一天呢，看到那個那個一頭，被拴在那個樹上的狗，正在吃那個麵包呢，那個我家的那個烏鴉呢，他(A)也很想吃，結果他就下來，下來以後呢，就對狗說“你能不能那個繞着那個樹打圈兒啊”那個狗說(B)“這有什麼難的”，結果他那狗(B)挺笨地，就不断地打圈，打那個繩子，結果就自己給綁在樹上了。然後呢我家的烏鴉(A)就那個，就看着那個在綁在樹上的狗，把那個麵包給吃了。

《シート c E(B) > E(A) に操作》

C1: 我們家養了一隻狗(B)，這天給他(B)放了一點食物，放到旁邊把他拴在那樹上，因為還沒到時間就不讓它吃，然後就旁邊飛來一支烏鴉(A)，想給他(A)搶那食物，那個烏鴉(A)就怕那狗，他(A)就想了一個辦法，他(A)就围着這個柱子飛，然後那個狗(B)吧，就困着他追，生氣了。最後就說，繩子就捲在那柱子上了，這烏鴉(A)這個食物就成了烏鴉的了。

C2: 我家那個狗呢，特別笨(B)。有一天呢，(B)讓個烏鴉給騙了。那天是這樣的，我把那個狗呢，拴在樹上，然後給了他一塊面包吃。結果呢，那個烏鴉(A)看到我家那個狗被拴在樹上，就說(A):“你能不能繞着樹打圈兒啊?”我家的狗(B)說:“這有什麼難的?”就拼命地打圈兒，結果把自己越拴越緊，那麵包呢，(B)就讓烏鴉給吃了。

材料②A = ご主人 B = 奥さん

《シート a》

C1: 這是一個一對夫婦(A·B)，這妻子(B)看起來很厲害，就(B)命令她的丈夫去修

3-2. 調査協力者

言語資料提供者は、中国浙江省出身の北京外国語大学日本文化研究センター修士2年の女性2名(いずれも25歳以後C1, C2)である。浙江省での学校教育は北京語を中心とした言語生活で、大学および大学院の6年間は北京で生活していることから、産出された言語資料は北京語として扱う。

3-3. 手続き

言語資料は資料提供者の宿舎で、1996年個別面接方式で収集した。話者と筆者の位置については、話者が漫画の内容を詳しく筆者に伝える環境をつくるため、筆者は話者に背をむけ、漫画の内容を共有していない姿勢をとった³⁾。あいづちは打たなかった。実験は各シートごとにa→b→cの順で行った。

4. 言語資料の考察

4-1. 〈注視点〉と受け身文の分析

話者が誰を見ているかという〈注視点〉については、渡邊(1992)同様、能動文の場合は動作主を、受け身文の場合は認知的に卓立した部分として主語の位置に来る被動作主を〈注視点〉とする。また、今回は状態性の叙述についても、話者が何を認識しているかの手掛かりの一つとし、その主体を〈注視点〉とした。受け身文については、Jの多くが①では「持ち主の受け身」、②では「相手の受け身」、③では「直接対象の受け身」を使っているが、「持ち主の受け身」、「相手の受け身」の形式をもたない中国語では、シートaとb,cの叙述に違いがみられるかどうか。また、③の「直接対象の受け身」は中国語も持つ言語形式であるが、J同様〈固定注視点〉+受け身文という形で表現されるかどうかを検討する。

4-1-1 言語資料(C1, C2: 中国語母語話者) ——は動作主体 ~~~~は受け身文

材料①A=カラス B=いぬ

《シートa》

C1: 首先這個鳥, 和, 其實這個鳥(A), 他(A)很聰明, 他(A)就先跑得那個樹的左邊, 然後這個狗, 就引着這個狗也往左邊走, 然後這鳥(A)又飛到右邊。這樣轉來轉去, 最後那狗(B)被脖子上的繩就全部卷那樹上了或者是柱子上。最後這個食物那個狗就根本夠不着, 成了這個鳥的食物了。

3. 方 法

3-1. 実験材料

渡邊(1992)同様, 言語資料の収集を発話課題により行い, 録音した言語資料を文字化した。発話産出のための材料に, 3種類の漫画①②③を使用した。なおこれらの漫画は, 渡邊(1992)でも使用したものである。なお, 次の①②③は1992年のJの言語資料である。

①きにつながれたいぬがカラスがとんできたんでいぬがおこってカラスをおいかけてまわしているあいだにじぶんのくびをつないでいるつながきにまきついてしまっとうごけなくなったところでカラスにごはんをたべられてしまう。

[〈固定注視点〉→「犬寄りの視点」傍線は「持ち主の受け身」]

②おくさんにしばをかるようにといわれていやいややろうとしたらとなりにびじんのみずぎのじょせいがねていてよけしごとがすごくはかどったんだけどもそれはとなりのおくさんのしくんだことでしてけっきょくしごとははかどったけれどもなんかだまされたかんじだと。[〈固定注視点〉→「ご主人寄りの視点」傍線は「相手の受け身」]

③まちなかでかいものについているみたいであっちこっちとショーウィンドーにひっかかってこれがほしいということについているらしくてさいごはこう—なんていうのかなにかのつつみみたいにふくをからげてものがみえないようにされてしまった。[〈固定注視点〉→「子供寄りの視点」傍線は「直接対象の受け身」]

本稿では漫画①②③を実験材料として用い, 表-1のようなabc3種類のシートを作成した。aはさきの調査と同様の指示内容で, b・cは久野(1978)の共感度(Empathy)で表すと, $b: E(A) > E(B) \rightarrow B$ よりもA寄りのカメラ・アングル, $c: E(B) > E(A) \rightarrow A$ よりもB寄りのカメラ・アングルとなる。この3種類のシートを使って, 話者にある一人の登場人物へ共感を促すべく操作をおこない言語資料を収集した。

表-1 シートの状況と指示内容

シート	シートの状況	操作のための具体的な指示内容
a	登場人物のいずれも無彩色	〈注視点〉〈視座〉指示なし 「漫画のストーリーを友達に伝えるように話して下さい。」
b	左側の登場人物(A)青色	〈注視点〉: 登場人物の左側の人(A) 〈視座〉: ①「あなたの家の～です。」, ②③「あなたの知り合いです。」
c	右側の登場人物(B)桃色	〈注視点〉: 登場人物の右側の人(B) 〈視座〉: ①「あなたの家の～です。」, ②③「あなたの知り合いです。」

展開における「中立視点」の傾向についても、Sの発話を日常的に観察する過程で、さらに強く確信を持つにいたった。

しかし問題は、さきの調査で、Sが実際に母語で展開していく際、登場人物の誰に共感していたかについてのフォローをせずに、Sの母語に関する文法の先行研究だけでSの母語の「視点」を分類したことである。そのため、Sが母語でどのように出来事を把握していたかの確認が欠けていたことは認めざるを得ない。そこで、Sが誰を中心にストーリーを展開しているのか、そのときの言語形式はどのようなものであるかについての考察ができる方法を考え、あらためて実験的調査を行うことにした。

2. 問題の所在と本稿の目的

渡邊(1992)では、中国語、韓国語、ドイツ語の3言語について調査したが、本稿では中国語の「視点」にかかわる言語形式を明らかにする。その理由は、中国語母語話者(以下Cと記す)は日本語の談話展開で〈移動注視点〉による「中立視点」が最も多く、Jの「ある人物寄りの視点」とは大きく異なる展開の様相がみられたこと、上に述べたように、Cの母語の〈注視点〉も〈移動注視点〉であったからである。

筆者の調べたかぎりでは、中国語研究において、目下、話者の「視点」に関する体系的研究はなく、文法用語に話者の「視点」を表す用語はないが、「立足点(立脚点)」という概念がある。これは、大江(1975)の「ホームベース」という、事態を眺める側のいる場所という概念に近い概念であり、劉月華ら(1991)によれば、それは「話し手の位置または“我”の位置」、「第三人称を用いて客観的に叙述・発話するときは、・・叙述されている人物のいる位置」とあり、単純方向補語“来 lai”, “去 qu”を用いるとある。このことから、中国語で「ある人物寄りの視点」の言語形式には“来 lai”や“去 qu”が使われることは予測されるが、談話レベルの言語表現から「視点」に関わる言語形式について、まとまった研究はまだ行われていないようである。著者は談話レベルの考察から中国語の「視点」に関わる言語形式を探り、主体の認知プロセスと表現形式を明らかにすることが、今後Cの日本語のわかりにくさの追求に必要な基本的作業としてであると考え、本稿では、さきの調査法の問題点を反省し、Cが登場人物の誰に共感していたかがわかる方法を用いて、その時の中国語の叙述で〈注視点〉はどうであるか、受け身文が使われるか否か、さらに話者の「視点」とかかわる言語形式が存在するかどうかを検討する。

談話展開がこのような〈移動注視点〉になる原因として、登場人物のいずれをも動作主体とした能動文で叙述されていること、動作主体の異なる完結文を接続して展開していくことによるものであることが判明した。このような〈移動注視点〉による展開の「視点」を「中立視点」と設定し、Sの展開スタイルの特徴と考えた。考察の結果、Sの日本語のわかりにくさの原因には、接続詞、指示詞の問題に加え、JとSの「視点」の違いが大きく関与していることが明らかになった。また、Sの日本語と母語の発話を対照したところ、Sの日本語における〈移動注視点〉は、母語の発話の影響によるものであるという結論を得た²⁾。本稿は、以上の1992～1996年に発表したSの談話展開に関わる要素のうち、「視点」に関して事例研究の方法で再考を試みるものである。

1-2. 再考の動機—実験的調査方法の反省

これまで筆者はこのテーマに関して、日本語教育学会や津田日本語教育センターのシンポジウム、東京大学異文化コミュニケーション研究会などで発表する機会を得たが、コメントのなかで最も多かったのが実験方法に関してであった。Jが「ある人物よりの視点」で、Sが「中立視点」になるという特徴は、日本の漫画を材料としたことが影響したからではないかというものである。つまり、Jは漫画の主人公を理解できたので主人公を中心に展開したが、Sは誰が主人公であるかを十分理解できず、そのため複数の人物の行為を叙述する結果になったのではないかという意味である。このコメントに対して筆者は、①韓国語のSには〈固定注視点〉の傾向がかなり強くみられた。だから韓国語のSのみ漫画の主人公が理解でき、中国語のSとドイツ語のSは主人公が理解できなかったとは考えにくい。②Jにはアメリカの漫画で、主人公がまったくわからないものにも、同様に〈固定注視点〉の傾向がみられる。③Jには漫画の主人公ではない人物を中心に展開した〈固定注視点〉もある。以上の3点から、日本の漫画という材料が原因で、JとSに異なる「視点」が生じたとは考えにくいと述べてきた。

Jの談話の「視点」分類は、言語形式と意味の体系的な研究を進める認知言語学の成果や久野(1978)の研究成果を参照したが、この点については問題はなかったと思われる。なぜなら「言葉の意味は、主体の認知プロセスと密接にかかわっており、表層レベルに言語化される表現形式のちがいが、外部世界にたいする主体の把握の仕方、問題の状況にたいする解釈のモードの違いを反映している」(山梨1995:6)からである。同時に筆者は、Sの日本語の談話

「視点」再考—中国語の「視点」を表す言語形式—

渡 邊 亜 子

1. はじめに

1-1. 「再考」の対象

1992年当時、中・上級日本語学習者（以下Sと記す）の日本語の談話展開には、文脈形成の過程で接続詞や指示詞の用法に問題があり、Sの日本語のわかりにくさの原因の一つになっていることが、池田(1974)や伊豆原・嶽(1992)らによって指摘されていたが、筆者はSの日本語に接するたびに、接続詞や指示詞以外にも日本語母語話者（以下Jと記す）の表現とは異なる叙述をしているという印象と、Sの母語ごとに展開法の特徴があることを感じていた。そこで筆者は、先行研究をふまえ1992年、中国語、韓国語、ドイツ語の母語話者の日本語と、Jの日本語談話展開の比較調査を行い、「日本語学習者の談話における視点」(1992 日本語教育学会)、「中・上級日本語学習者の談話展開—『視点』と接続表現からの考察」(1993 津田日本語教育センター)を公表し、これらを『中・上級日本語学習者の談話展開』(1996 くろしお出版)としてまとめた。概要は次のとおりである。

調査では、話者に「漫画のストーリーを友達に伝えるように話して下さい」と指示し、その指示から産出されたSとJの日本語の言語資料を言語形式から判断して、話者の「視点(カメラ・アングル)」¹⁾の分類を行った。その結果、Jの日本語は漫画の内容の叙述の際、一人の人物に〈注視点〉を固定して、談話を「Aは～して、～て、Bに～された・もらった」のように展開していく傾向が強く認められた。このJの〈注視点〉の固定は、構文としては受け身文と授受補助動詞、連接では前件と後件の同一主体を要求する接続助詞「て」によって支えられていることが判明した。このような〈固定注視点〉による話者の「視点」を「ある人物寄りの視点」と設定し、Jの談話展開スタイルの特徴と捉えてみた。

一方、Sの日本語による叙述は、登場人物のそれぞれに〈注視点〉を移動する傾向がみられ、「Aはどうした。Bはどうした。」という展開となった。Sの